

新・雪国

映画文学人生論

原作：笹倉明 (1999) 「廣濟堂出版」
監督：後藤幸一(2001) 脚本：笹倉明 後藤幸一 門馬隆司
出演： 萌子 笛木夕子 撮影 羽方義昌
芝野邦夫 奥田瑛二 音楽 マリオ鈴木
染乃 南野陽子 小林 坂上二郎
菊江 吉行和子 美帆 あき竹城

旅先は国境の彼方というにすぎなかった

川端康成『雪国』の文学を理解するには映画が参考になる。新感覚派の作家が文章で表現した雪国が、映像や音楽との複合効果によって観客の感覚に訴えてくる。

大庭秀雄監督と豊田四郎監督の映画を観て、そう思った。しかし、昭和三十二年と昭和四十年の古い映画だ。公開されてからおよそ半世紀たっている。

上越新幹線がはしっている現在、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という情趣が残っているだろうか。越後湯沢に駒子のような素人芸者がいるはずがない。

などとぼんやり考えながら、DVDレンタル店の棚を眺めていると、『新・雪国』という映画のタイトルが目についた。原作は笹倉明、聞いたことのない名前だが、平成二年に直木賞を受賞している。

直木賞作家の原作映画なら期待できるかもしれない。早速、DVDを借りてきて、『新・雪国』を観た。『雪国』よりも面白い。

その理由は、現代風の芸者を演じるヒロイン萌子（笛木夕子）の魅力か、それとも相手役の芝野という中年男（奥田瑛二）に感情移入できるからか。『雪国』の遊び人島村は好きになれないが、会社を倒産させ、妻子と別れ、死に場所を探す芝野のダメ男ぶりには同情の余地がある。



新・雪国

映画文学人生論

時は一九九九年、川端康成生誕百年にあたり、処は月岡温泉。『雪国』の湯沢と同じく越後の温泉という因縁がある。

芝野はふらふらと温泉街に迷い込むが、一人客を泊めてくれそうな宿はない。たまたま入ったそば屋で萌子が芸者をしていると聞き、泊めてくれそうな宿を紹介してほしいと頼んだ。二十四歳と五十歳、年の開きはあるが、人生への絶望という一点で境遇が似かよっている。

芝野は全財産の二百万円を萌子に渡し、好きなように使ってよい、その代わり金がある間だけはずきあつてほしいと言った。あんだ、死ぬ気だねと萌子は芝野の心を察して、泣きだす。

金融バブル崩壊と交通事故ではじきとばされた男女のメロドラマ。『雪国』の島村と駒子との関係とはたいへんな違いだ。これが純文学と大衆文学との違いかとも思った。

私のホネをいえば、『雪国』よりも『新・雪国』のほうが面白いが、『新・雪国』の販売部数は今のところ一万部以下という。せめて十万部以上売れなければ大衆文学とはいえないだろう。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」と「旅先は国境の彼方というにすぎなかった」という冒頭の文章を比較すると、やはり『雪国』のほうが感覚に訴える力が強い。

春はおぼろに ほんに月岡お湯の町 月岡小唄